帝都復興事業により設置された橋詰広場の現況－東京を対象として－*

The current state of bridge foot plaza set up by Reconstruction Project after Kanto Earthquake for Tokyo

伊東孝祐**、伊東孝***、川西崇行****

By Kousuke ITOH, Takashi ITOH, Takayuki KAWANISHI

概要

橋詰広場とは橋の袂にある小さなオープンスペースであり、震災復興計画において初めて明文化され、そして設置された。本研究は帝都復興事業完了時から 80 年後の今日における橋詰広場の残存状況を明らかにするとともに、今日的特徴について考察することを目的としたものである。橋詰広場は設置が確認されていた 280 橋 994 箇所のうち 248 橋 716 箇所現存していた。今日、橋詰広場は都市内に輻輳する様々なネットワークの結節点に位置し、治安、防災、交通、休憩、情報提供、都市美等の様々な機能が重層的に集積した空間である。

1．はじめに

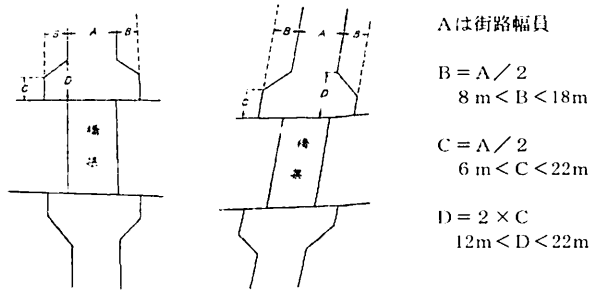
帝都東京に未曾有の被害をもたらした関東大震災からの帝都復興事業の完了式典（1930 年 3 月 26 日開催）から今年でちょうど 80 年を迎える。震災復興計画にはそれまでの日本に見られなかった都市づくりの様々なアイディアが盛り込まれたわけであるが、橋詰広場もその一つである。

橋詰広場を初めて制度化し、大きさや設置施設を決めたのは震災復興計画である。形は基本的に台形で、大きさは道路幅員を基準にして決められていた [1]。また橋詰広場に設置する施設についても「路上工作物配置基準」（大正 15 年 6 月 7 日復興局長官決議）で明文化されている [2]。

橋詰広場に関する研究としては、帝都復興時の橋詰広場に関する伊東らの研究 [3]、震災復興計画時の計画思想に関する伊東らの研究 [4]、空間特性と利用実態に関する伊東らの研究 [5]、設置施設に着目した高畑らの研究 [6]が見られる。

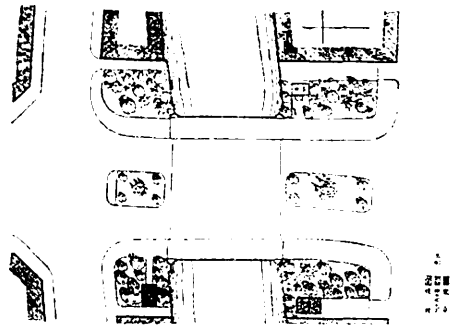
本論は、帝都復興事業から 80 年後の橋詰広場の現存状況を明らかにするとともに、都市空間との脈絡から今日的特徴を考察することを目的とする。

調査対象地域は帝都復興事業区域とし、帝都復興事業完了時に当該地域内に架設されていて、現時点で架設位置が確認できる 408 橋を対象とした。帝都復興事業完了時の橋詰広場の設置状況把握については『帝都復興事業誌　区画整理篇』に記載の換地位置決定図を用いた。現在の状況については、408 橋すべてへの現地調査により把握した。なお、橋が撤去されて実質橋詰広場ではなくなっている箇所についても、形状や設置施設から痕跡が確認できるものについては橋詰広場として取り扱っている。



図－1　橋詰広場の大きさ

（出典：『帝都復興事業誌 土木篇 上巻』、復興事務局、p.58、1932）



図－2　江戸橋附近平面図

（出典：『帝都復興事業誌 土木篇 上巻』、復興事務局、p.94、1932）

*keywords：帝都復興事業、橋詰広場、東京、現況

**正会員　博士（都市科学）

（〒141-0022　東京都品川区東五反田 5-22-5）

***正会員　工博　日本大学理工学部社会交通工学科

****正会員　工修　早稲田大学地域社会と危機管理研究所

2．広場単体の視点から見た橋詰広場

1）設置状況

帝都復興事業完了時点で橋詰広場は 994 箇所設置され、現在は 716 箇所と当初設置の 72%が現存していた（図－3、表－1）。河川・運河の埋め立て、橋梁撤去によって橋詰広場としての機能を喪失しても広場が残るケースも見られ、その要因として橋詰広場に公共的施設（例えば、交番、公衆便所、児童遊園等）が設置されている場合、河川敷跡が親水公園として再整備されてアクセス路として活用する場合（墨田区、江東区）が挙げられる。

橋詰広場は 1 橋梁に原則 4 箇所設置されるが、周辺の区画整理後の状況によって 1 橋梁あたりの設置数は必ずしも 4 箇所設置されたわけではない。現在においては、河川・運河の埋め立て、橋梁撤去による跡地の売却、隣接地との一体整備等の様々な要因により 1 橋梁あたりの設置数は微妙に変化している（表－2）。

『帝都復興事業誌』によると橋詰広場の基本的な形状は台形となっているが [7]、最も多かったのは長方形であり、現在でもその状況は同じである（表－3）。但し旧深川区においては河川・運河の近傍に並行する道路が少ないこともあり、他の区と比較して台形が多く見られた。また、河川・運河に沿って道路があるような場合でも、隅切部分を橋詰広場敷地として確保しているような例も見られた。

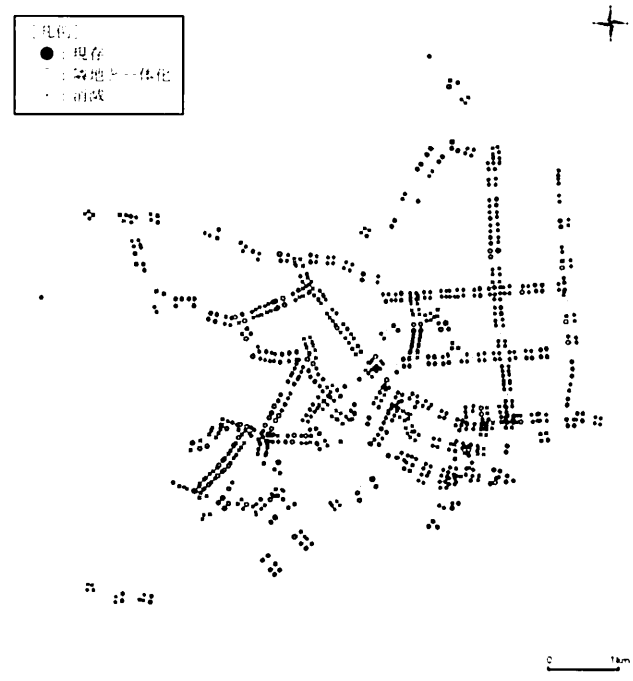
2）設置施設

帝都復興事業において橋詰広場に設置する路上工作物としては巡査派出所、巡査見張詰所、材料置場、撒水井戸、撒水用ポンプ、共同便所、機具納庫（消防または消毒用）の 7 施設が定められていた [8]。これら施設以外にも植栽が施されている橋詰広場もあった [9]。これら施設等が設置されていない橋詰広場の様子については不明な点が多い。僅かに残された当時の写真を見てみると [1]、がらんとしたオープンスペースとなっていたようである。現在、橋詰広場には前述した交番、公衆便所、機具納庫以外にも様々な施設の収容場所となっていた（表－4）。これら施設は必ずしも橋詰広場が適地であるというものではないが、橋詰広場が道路と水路の結節点に位置するという点から必然的に設置されたもの（例えば、河川敷跡を利用した公園・護岸へのアクセス通路）、都市景観（街路、水辺、橋梁）の結節点に位置するという点から設置されたもの（ポケットパーク）もある。また、中央区においては右岸と左岸の橋詰広場を人工地盤でつないで公園とするような利用形態も見られた。

3．都市全体の視点から見た橋詰広場

1）都市計画決定

1933（昭和 8）年の都市計画法の改正により橋詰広場が都市計画上制度化された [10]。これにより橋詰広場は都市計画道路の一部として位置づけられたわけであるが、現在、都市計画道路に橋詰広場がとられている箇所はわずかである [3]。第二次大戦後は不法に住宅を建てられた



図－3　橋詰広場の現存状況（2009 年 12 月末時点）

表－1　地域別橋詰広場の設置・現存状況

		帝都復興事業完了時（箇所）	現在（2009 年 12 月末） 現存（箇所）	消滅（箇所）
千代田区	麹町区	30	19	11
	神田区	70	53	17
中央区	日本橋区	137	85	52
	京橋区	191	128※	67※
港区	芝区	23	13	10
文京区	小石川区	2	2	
	本郷区	3	1	2
台東区	浅草区	26	16	10
墨田区	本所区	141	122	19
江東区	深川区	364	269	95
	城東地区	8	7	1
計		994	716	284

※帝都復興事業以降橋詰広場が設置された箇所があるため、現存数と消滅数の和が完了時の数とは一致しない。

表－2　橋梁単位で見た橋詰広場の設置・現存状況

		帝都復興事業完了時	2009 年 12 月末時点 設置数	うち河川埋立	うち橋梁撤去
設置		280	248	117	80
	うち 1 箇所設置	13	43	36	34
	うち 2 箇所設置	53	54	29	23
	うち 3 箇所設置	56	51	14	11
	うち 4 箇所設置	158	100	38	12
なし		128	164	148	140

※現在の設置数は隣地と一体化した箇所も含む

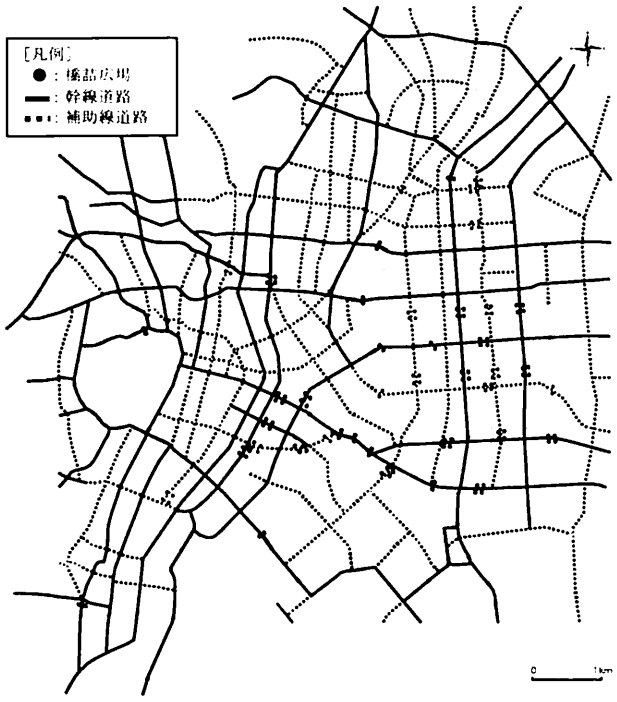
表－3　橋詰広場の形状

	台形（箇所）	長方形（箇所）	三角形（箇所）	隅切三角形（箇所）	隣地と一体化（箇所）
帝都復興	225	667	47	55	－
現在	150	438	28	22	77

表－4　橋詰広場設置物一覧[2]

		帝都復興事業完了時	現在
交番・地域安全センター		81	28
公衆便所		110	85
防災資機材格納庫		不明	79
植栽地（全体植栽）		249*	183
児童遊園		－	59
都市公園（街区公園）		－	17
ポケットパーク		－	79
オープンスペース		－	72
自動車専用道路出入口		－	19
鉄道駅出入口		－	10
駐車スペース（自動車・自転車）		－	16
親水公園・親水護岸出入口・通路		－	139
ライフライン中継地（上下水道等）		－	103
その他	電話ボックス	－	18
	国旗掲揚用ポール	－	17
	地蔵尊・稲荷神社等	－	15
	碑	－	62
	うち関東大震災関係	－	5
	説明板・案内板	－	80
	掲示板	－	49
	消火器	－	18
	ベンチ・腰かけ	－	161
	街灯	－	101

*：帝都復興完了時は全体植栽以外も含む



図－4　都市計画上存置されている橋詰広場の分布

り、橋詰広場を計画から廃止して欲しいという住民の要求、財産管理上の問題等により昭和 30 年代以降の道路計画に橋詰広場が折り込まれなくなったとの指摘もあった[11]とのことから、都市計画道路の見直し時に問題箇所が順次計画変更されていったと思われる。

図－4は現在、都市計画道路に橋詰広場がとられている位置をプロットしたものである。隅田川左岸地域、特に江東区に多く見られる。また、隅田川右岸地域においても日本橋川下流部周辺に集中して見られる。このような分布となっている理由として計画変更の有無による差異とも考えられるが、差異の要因は不明である。

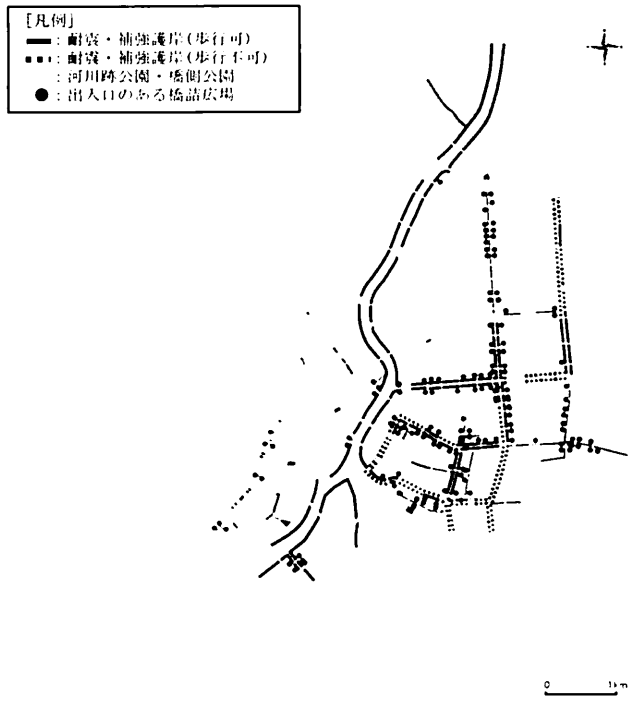
2）緑と水辺との結節点

震災復興計画では、橋詰広場を結節点として、緑（街路樹）と水路（網の目のように存在していた河川・運河）、街並みを都市空間の中に有機的に結びつける「緑と水のネットワーク」が考えられていた[12]。現在においては、帝都復興事業完了時と比較すると河川・運河網は大幅に縮小してしまったが、逆に街路樹設置延長は増加している。また補強された護岸に植栽が施され、街路だけでなく水路に沿って緑のリンクが形成されている（図－5）。

今日、帝都復興当時と比較してノードとリンクの緑量は飛躍的に増大した。緑と水の規模は逆転してはいるが「緑と水のネットワーク」は依然形成されていた。帝都復興当時とは異なり、結節点に位置する橋詰広場を介して街路と水辺（護岸テラス、親水護岸）が行き来できるようになり、橋詰広場によって緑と水の結びつきはより強くなったといえる。

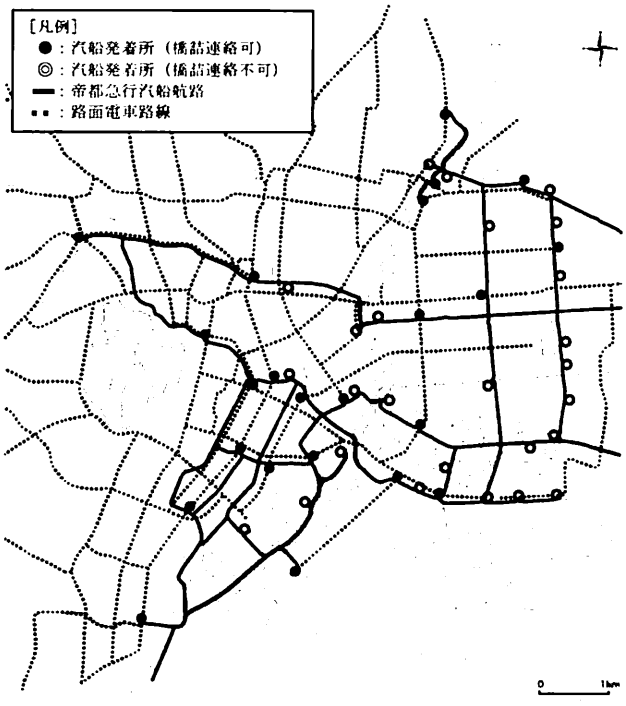
3）交通結節点

帝都復興当時、街路と水路の結節点に位置する橋詰広場は陸上交通（路面電車）と水上交通（汽船）との乗



図－5　河川敷跡公園・護岸テラス・親水護岸と橋詰広場

り換え場所にもなっていた。図－6は路面電車路線（東京市電気局、城東電気軌道）と汽船航路（帝都急行汽船）を示したものである[13][14]。汽船乗り場の大半が路面電車路線のある橋詰に位置しており、橋詰広場が結節点になっていることがわかる。今日、陸上の公共交通機関の主役は路面電車から地下鉄・バスに変わり、水上交通は観光目的に一部区間で水上バスが運行されているのみで乗り場は必ずしも橋詰に設置されていない[4]。陸上と水上の交通ネットワークの結節点という観点から見ると橋



図－6　1928（昭和3）年頃の交通ネットワークと橋詰広場

詰広場の結節点機能は大幅に後退したといえる。

（4）街歩きネットワーク

昨今の歴史をベースにした街歩きブームの中、周辺地図等の案内板、ベンチ、公衆便所のある橋詰広場は街歩きの休憩・情報享受スポットとして都市住民や観光客に対して利便を供している。東京都はまちづくりの一環として全23コース、全長240.5kmの「歴史と文化の散歩道」を設定・整備したが、コース上に位置する橋詰広場は情報提供・休憩スポットとしてポケットパーク化された箇所も見られる。橋詰広場が適地だったというよりも、たまたま空間があったために整備されたという側面が強いと思われるが、帝都復興時には見られなかった橋詰広場の今日的活用方法のひとつである。

4．まとめ

既存資料をもとに帝都復興事業完了時、橋詰広場が994箇所設置され、現況調査により716箇所（72%）が現存していることを確認した。河川埋め立てや橋梁撤去でも広場が残っていたのは、交番、公衆便所といって公共的施設が設置されていたり、河川運河の親水化によるアクセス路の必要性から既存空間の橋詰広場が存置されたものと考えられる。

都市内に輻輳する様々なネットワークの結節点に位置する橋詰広場は、治安、防災、交通、情報提供、休憩、祭事、都市美といった機能が重層的に集積した空間となっていた。それは、帝都復興事業以降の様々な都市づくり政策の中で利活用されてきた結果である。

帝都復興事業区域内に存在する橋詰広場は、復興橋梁や復興公園等と同様に震災復興計画の計画思想や帝都復興事業の事業内容を今日まで伝える「帝都復興事業の遺産」のひとつである。また、河川が埋め立てられ、橋梁が撤去されても、広場空間が残存していると、そこはかつて河川や橋があったことを示す都市構造の記憶の一部でもあるといえる。

本論は土木学会土木史研究委員会帝都復興80周年関係史資料調査検討小委員会（メンバー：伊東孝委員長、五十畑弘、伊東孝祐、大沢昌玄、川西崇行、紅林章央、昌子住江、田中常義）において実施した帝都復興事業残存状況調査の結果をとりまとめたものである。

補註

(1)『帝都復興記念帖』、『建築写真類輯』、「関東大震災復興工事関係写真集（土木学会所蔵）」等。

(2)帝都復興当時の交番、公衆便所の設置状況は各区史の記述をもとに集計。

(3)図面は東京都建設局道路建設部「東京都都市計画道路事業現況図（区部）」（平成18年3月31日現在）を用いている。

(4)現在、帝都復興事業区域内にある水上バスの乗り場は、浅草、浜離宮（以上、東京都観光汽船㈱）桜橋、両国、浜町、越中島、明石町、（以上東京都公園協会運営の東京水辺ライン）。橋詰に隣接しているのは浅草のみ。

参考文献

1)復興事務局：『帝都復興事業誌 土木篇 上巻』、復興局、pp.57－58、1932

2)文献1）pp.95－96

3）伊東孝・岡田孝：震災復興橋梁の計画とデザイン的特徴－旧東京市内における復興局架設橋梁を中心として、第4回日本土木史研究発表会論文集、pp.59－70、1984

4）伊東孝祐等：震災復興橋詰広場計画の経緯と成立－旧東京市日本橋区および京橋区をケーススタディとして－、土木史研究、第18号、pp.93－101、1998

5）伊東孝祐等：橋詰広場の空間的扱いと利用特性、都市計画論文集、第26号、pp.43－48、1991

6）高畑充宏等：震災復興橋詰広場にみる施設と分布－下町3区（墨田・江東・中央）を事例として－、総合都市研究、第65号、pp.95－106、1998

7)文献1）p.58

8)文献2)

9)文献1）pp.78－84

10)建設省編：『都市計画法令要覧』、ぎょうせい、pp.192－201、1994

11)堀江興：東京の幹線道路形成に関する史的研究（学位論文）、p.179、1990

12)伊東孝：『東京の橋－水辺の都市景観』、鹿島出版会、pp.205－207、1986

13）帝都急行汽船株式会社創立者編輯：『昭和初期帝都急行汽船運輸系統図（復刻版）』、人文社、2005

14)『昭和四年 帝都復興 東京市全図（復刻版）』、人文社、2005.12